

速報: 1st International Congress on Ceramics (25-29 June 2006, Tronto, Canada) 参加レポート

鈴木 義和

京都大学エネルギー理工学研究所

suzuki@iae.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

2006年6月25日～29日の日程で開催された、第1回セラミックス国際大会(1st ICC)に参加し、研究成果の発表と情報交換を行ってきた。第1回の会場はカナダのトロントである。この大会はアメリカ・ヨーロッパ・日本の各セラミックス学協会が中心となり、セラミックスのロードマップを作るという新たな試みであり、「学会」というよりはかなり応用に中心をおいている。ビジネスミーティング的な側面がかなり漂っていた。

筆者は日程の都合上、開会式が開かれた25日(日)の夕方から、自分の発表がある27日(水)の夕方まで参加した。最終日にはロードマップ素案の発表があったそうであるが、それを逃したのは多少残念である¹。

今回は、インターネット中継(もちろん有料)を行うとすることで、「会場の写真撮影はダメ!」となり、雰囲気をお伝えできないのが残念である。ただ、初日基調講演まではとりあえずOKだったので、それに限って簡単に紹介する。

2. 開会式と基調講演

開会式では、日本からは名古屋大学学長の平野先生がオーガナイザーの一人として参加されていた。開会式に引き続き、基調講演となったが、今回の目玉はやはり京セラ創業者である稲盛和夫氏の講演と言えるだろう。京セラは本会議のメインスポンサーでもあり、稲盛氏に加えKYOCERA International, Inc.のRodney N. Lanthorne氏も26日にPlenary講演を行うという力の入れようである。



Fig. 1 1st ICCの開会式。下は名大の平野先生

¹ 後日、CD-ROMでロードマップが送られてくるそうである。単体で買えば1495USドルと目が飛び出るほど高い。アメセラも資金確保に大変なのだろうか?



Fig. 2 京セラ創業者稲盛和夫氏。基調講演では京セラの歴史を振り返る

3. レセプションとロードマップ事情

初日、日曜日の夜の基調講演の後にはちょっとしたレセプションがあったが、ペーパー方式のため、残念ながら盛り上がりは今ひとつというところであった²。まあ、国際会議の初日はこんなものだろう。

レセプションでは、ロードマップエディターの NASA の Dr. M. Singh 氏（エンセラ業界では Jay さんで通っている）と話すことができた。前頁の脚注にもあるが、ロードマップ CD をアメセラではかなり高額で販売したいとの思惑がある。いわば「資金源」である。筆者からは、「ロードマップなんてものは、みんながある程度自由にアクセスできて始めて役に立つものだし、あまり高すぎると誰も見ないのでないか。せめて、代表的なものをアメセラの Bulletin で紹介し、より詳しく知りたい人は CD-ROM を買

² 「なんであれだけ高い参加費とってビール一杯も出さへんの？」というブーイングがあちこちで飛び交っていた。微妙に関西弁が入っているのは愛嬌である。第3回の日本開催では、せめてビール一杯はだすべきだろう。

う、というようにすべきでは？」、といったことをお願いしておいた。実際のところ、どうなるのだろうか。なお、Singh 氏は窒化ケイ素ベアリングあたりをロードマップの一例として考えているようであった³。

4. 展示イベントについて

107 回 Annual Meeting の時もそうだったが、展示イベントは全体的にこじんまりしたものである。おそらく、他の材料系学協会の共催となる MS&T へ展示会イベントはシフトしていくものと思われる。

今回、日本セラミックス協会が展示ブースを出しているがアブストラクトにあったため、日本からの参加者は口々に、「偉い！セラ協、がんばってるなー」と言っていたのだが、残念ながらセラ協ブースはキャンセルされていた。ICC の主催者側であるのかかわらず、このキャンセルは謎である。私がこのニュースレター等で言い続けている「各種イベントでのセラ協論文誌無料配布」はどうやら今回もお預けのようである。

一方で、韓国や中国は小さいながらもきっちりブースを出しており、日本との温度差が感じられた。



Fig. 3 韓国セラミックス学会。ブースをキャンセルしたセラ協とは対照的であった…

5. 今後の ICC について

日本人の参加者とも話していたことであるが、今回の ICC は参加登録費がかなり高く、また、あまりにも「ふわっとした発表」や「単に自社の宣伝」とも思われる発表が相当多かったため、かなり不評であった。もちろん、非常

³ このレセプションで筆者は稲盛さんと少しお話をすることができた。稲盛さんは笑いながら、「尾池さん（京大総長）には、『建物を寄付して』と言われてるんですよ」とのことだったので、「そのときは是非宇治キャンパスへ！」とすかさずお願いしておいた。宇治に京セラ記念棟ができれば私の「暗躍」の成果かも（笑）

に参考になった良い発表もあったものの、全体のバランス的には「？」というところである。第2回のイタリアはさておき、第3回の日本開催はこのままでは参加者が集まらないのではないか、とさえ皆心配した程である。

ただ、これはあくまでも27日まで参加した筆者が受けた印象であり、最終的に出来上がったロードマップが良いものになっていれば、それで本大会の目的は十分達成しているのかもしれない。



Fig. 4 トロントの街並み。歩いて回れる良い街である。

今回は、技術的な内容をほとんど取り上げることができなかったが、次回はもう少し技術よりの内容をお届けする予定である。本稿が、セラミックス関連の技術開発を行われる方々にとって少しでもご参考になれば幸いである。

補足・免責事項

本稿は講演の合間に大急ぎでとったメモを元としているため、多少誤りがあるかもしれません。参考程度にお考えください。写真掲載に不都合がある場合は、削除いたします。お手数ですが、ご連絡くださいますようお願いいたします。また、写真の無断転載等をご遠慮ください。

Copyright (c) Yoshikazu Suzuki, 2006